

と

○家庭教育の完全は、家内一致せなければ、行はれぬと云ひますが、幼稚園も、保母同士一致して居らなければ、完全な保育は出来ません

○服従の徳を養はんとて、其意義を誤り、壓制に陥つてはいけません、古人も「兒童たる時は父母の従順なる従僕たり其成長に及んで之が親友たるべし」とこれは保母もよく味はつて貰ひたい

○幼兒、若し、過ちたる時は、吾より其非を言はずに、幼兒自身の衷心から、其非を悟るやう、仕向けられたし（過つて改むるに憚るなからしめよ）

●静岡縣保育會 同會は去る四月二十九日其第五回總會を静岡幼稚園に於て開會し豫て宿題となり居りし研究事項の發表、其他來賓の講説、祝辭並に餘興等あり、頗る盛會なりし由、來年は清水町に於て第六回總會を催ふことに決定せりと云ふ。

●群馬縣保育會設立 從來同縣下の幼稚園は各園孤立の姿なりしが先般有志者相謀りて高崎幼稚園に會合し群馬縣保育會を設立し毎年四月及十月の二回に總會を催ふすと決定せりと云ふ。

子供の自尊心

倉橋惣三

世に最も誤れる教育とて、子供の自尊心を害する教育ほど恐ろしいものはない。折角吾々が子供のために盡すのも、つまりは子供を正しい自立に至らしめ度いが目的である。而して、子供の心の正しい自立といへば、即ち自尊心がその根底にならねばならぬ。若し誤つて此の根底を害せば、いろ／＼の世話も却つて仇になる。

先づ自尊心とは何かといふことから考へる必要がある。自尊心の眞意義が往々誤解せられて居るからである。自尊心とは讀んで字の如く、自ら己を重んずるといふに他ならぬ。併し、茲にすぐ二つの問題が起る。重んずるといふのは如何なることか。自分といふのは如何なることか。此の二つが正しく解せられて居ないと、自尊心が飛んだ間違つたものになる。

自重は自ら重んずるのであるといふ處から、常に陥り易い誤は、度を越えて己を重んずることである。精神病患者の部にはいる誇大妄想とまでゆかないまでも、眞價以上に己を買ひかぶつて、傍から見ると笑ひ出し度くなる様な「自重家」も往々ある。つまり自重の止め度を知らない人達である。世間に斯ういふ「自重心」があればこそ、自重と謙遜といふ様な當然矛盾する筈のない二つの美德がさも矛盾するらしく人々に危ぶまるゝ様になる。そこで自重は自ら重んずるなりといふ、文字其まゝの解釋を吾々は避け度いと思ふ。そして新らしく次の様に定義して置き度いと思ふ。之れが自重心の一番正しい定義だといふ譯ではないが。之れから考へようとする子供の自重心の養成法には、少くも都合のよい解釋である。即ち、自重といふことは、己を己の眞價通りに置くことである。自分の眞價といふ線から下へも下げなければ、上にも上げないことである。其の正しい位置に自ら己

を置くことである。自分で自分を、そこに支持することである。此の線から下へ下がつたのはいじけである。卑屈である。自侮である。此の線から上へ上がったのが、急ばりである。傲慢である。己惚れである。線の下が自重でなければ、線の上も眞の自重ではない。但し斯ういふと自重といふことが大層六ヶしいことになる。理論上からは大にハツキリして居るが、實際上には容易のことではない。一世の達人にあらずんば殆んど出来まいといふ説も出るかも知れない。甚だ其の點が無いでもない。併し、こゝに自分の眞位置を線であらしたしたのは、いふ迄もなく幾何學的線ではない。そんなことを言つたら、自分の眞價は空な存在になつて仕舞ふ。此の線といふのは實際上には大分幅員のある線である。上へも下へも多少の融通のつく幅員である。心のことには要するに程度問題である。事實上はそう究窟に解せられんでもよいのである。

次に己を重んずるといふ、其の己れとは何をいふのか。茲にいふ「自分」が

(第一)自分の身體でないことは勿論である。自分の身體を重んずるのが自重ならば力士は皆自家である。

(第二)又自分の身につく衣裳裝飾の様なものを指すのでも勿論ない。處が之れは屢々間違つた考へを吾々に起させる。更つた美服でも着ると何だか自分で自分がるらく思はれて来る。汚い平常着か何かの時は、人に遇つても尻込みしながら、美服の時は、人を何とも思はんといふ様な態度が起る。一時間前の平常着の時と、美服に更めた後と、自分そのもの、眞價に一厘一毫の違ひが起つたのではない。しかもそこに格段の差がある様に他人が思ふのは兎に角く、自分でそんな氣になる。斯ういふのを孔雀的自重と名づける。此のことは心理的にいへば、餘程理屈のある、いはゞ無理のない顯象なのであるが、倫理的には随分と馬鹿

鹿氣たものである。

(第三)人から認められた自分の評判が眞に自分でないことも勿論である。然し之れも心理的事實としては屢々吾々に起る。假令は若い音樂者が聴衆の前でピアノでも弾ずる。自分では今日は出来のよい方だと自信があつても、聴衆がとんとほめて呉れないと、自ら氣がひけて来る。それに反して、聴衆がお世辭にでも非常に喝采して呉れると自分では實はそれ程と思つて居なかつたのでも、何だか、今日は餘程ゑらひピアノにでもなつた様の氣がする。その前の時と今度と、自分の眞價に於ては大した變りもないのに、他人の賞する賞しないによつて、自重の分銅が急に變つて来る。丁度元來同じ容積の水銀が外氣の温度次第で昇降する様なものである。かういふのを寒暖計的自重と名づける。之れ亦心理的には無理ならぬ顯象であるが倫理的には甚だくだらないものである。孔雀的自重や、寒暖計的自重が何故倫理的に馬鹿

らしい、くだらないものであるかといへば、兩者とも、自分の線の上へ、他のものゝ力によつて、持ち上げられて居るからである。従つて、他のものゝ力次第で、どつかりと下へ落されるからである。孔雀の毛のぬけた時、寒暖計の水銀の氷點下へ縮こんだ時、そういふ時のみすばらしさがあるからである。即ち之等は自重の如く自ら思はれても、實は少しも自分で自分を重んじて居るのではない。

(第四)それから、もう一段ひどいものになると、自分にそれだけの眞價があるのでなく、又他からも敢て持ち上げて呉れるでもないが、たい、ふわ／＼と思ひ上つて居る人々がある。何となく夢みる様に、何だか始終得意げに浮き／＼して、どこがゑらいといふとが他から見ても分らないは勿論、自分自身にも、よく考へると自分のゑらい點とは分らないが、しかし何だかゑらい様な氣がして獨りでいゝ氣になつて居る人達である。斯ういふ

のを風船的自重となづける。極く罪もない、たわいないものであるが、それだけつまらないものであることは言ふまでもない。昇れ／＼天まで昇れで右へ左へ、ふわり／＼と昇つて行くのは、得意氣なものに相違ないが、風船の上昇は空氣より比重が少い爲め、軽い爲めだと聞くと、昇るからとて貴さは少しもない。

斯ういふ風に考へてゆくと、自重らしく見へもし自ら思はれもするものゝ中に、似而非自重が随分少くない。そこで、問題を初めへ歸して、眞の自重の、その自分とは何かといふと、即ち眞我である。その日／＼の相場の變動で上下しない自分である。人こそ知らね、或は人が知らうとも賞めようとも、我れは眞に獨り知る自分である。若し自重の眞髓が此の點に固定して居れば、その人は自ら高ぶらぬと共に、自ら舉めることもない。そこで、今迄は主として、線を上へ越へた誤りの方を考へたから、今度は線を下へ降りた誤りをも吟味

して見なければならぬ。子供の正しい自尊心を養成する爲には、一般論としての正しい自尊心を充分詳かに明かにして置かなければならぬのである。

(第二)自ら己を卑めるには色々其の場合の理由もあるが、第一には病的なものもあるといふことを知らなければならぬ。其の病的にも、先天的の一時のものとあるが、一口にいへば氣の弱い性質といはれるもの、即ち畏縮性の性癖である。その烈しいのは精神病患者にあつて、前に一寸述べた誇大妄想狂の反對に、何でも自分をだめに考へるのである。そう烈しくない處で、こういふ傾向は通常の人にも往々ある。又吾々でも一寸した體の疲勞とか衰弱とかで、何故こうだろうと自ら疑はるゝ程意氣地なく、氣のいぢけることがある。その外的原因はいろいろのことから起るが、内的にはつまり神經の一種の衰弱である。自ら勵ましても勵まし甲斐のないのは氣力のもとと神經が弱

つて居るからである。他から見ても、程に思つても、しよげかへつて手のつけられない様なのは、矢張り其人の神經の力が衰へて仕舞つて居るからである。こういふのは心のこと、いふよりは一種の機能的病氣であるから、その方から恢復してゆくより他仕方ない。責めたとして仕方ない。同情すべきのである。

(第二)自卑の最卑しいのは、自利の爲にする自卑である。利益の爲には心の張りもない、我から我を辱めて耻もしない類である。こういふのも生れながらにして皆そうであつたのではあるまいと思ふと、境遇上氣の毒になることも少なくないが、さりとて、そのさもしく、下げ果てた卑しい心根は、非自重の最甚しいものである、之れは多くいふまでもあるまい。

(第三)次には、一寸自重らしく見へて、其の實甚だ自卑の場合が屢々ある。醉漢が夜の町で犬に吠へられた。頻りに喧嘩して居る。犬と人間と喧

嘩して居る。醉漢の心では人間様が犬なんかに負けては、自尊心を害するといふのかも知らぬ。併し、犬の相手になつて喧嘩して居る人間様は、犬まで己れを下げて居るのではないか。召使を相手に、ムキに喧嘩する奥様も、幼い子供を相手に、眞赤になつて喧嘩して居る先生も、こんなものに負けては、自重を害すると思つて居るのであらうが、その實そんなもの(其の人の所謂)まで自分を下げて居るのである。

(第四)第三と同じようなことが、殊に周囲の傍觀者に對する體面とかいふ譯で行はるゝことがある。あんな奴を相手する吾輩ではないが、人多勢見て居たから相手にして來たといふ類のこととは、往々にして聞くことである。そしてその傍觀者といふのは何かと聞くと、随分くだらない者達であることがある。つまり「吾輩」は、先づ傍觀者まで自分をさげて、次に相手まで自分をさげて居らるゝのである。喧嘩争ひまでゆかないでも

随分といやにくだらなくゑばつて居る人達は、多くは此の第四の類に屬して居るのである。ゑばつて、實は自ら自分を卑して居ることを證據だてゝ居るのである。

(第五)第三、第四の様なのは、傍から見ても笑しくこそあれ、まだ罪のない方である。それが極くいやなものになると、自分では自分をゑらいと思ふ心は大にあるけれども、それが其通り、人に認められなかつたり、陽にさつぱりとゑばれない處から、或はいぢけた、ひねくれた自尊心となり。或は嫉みとなり、僻みとなり、妬みとなる。こういふのに限つて、蔭へまはつては他人を罵り、已れを高ふして、それで以て辛ふじて自分を慰めて居る。眞の自重からいへば自ら卑むるも甚しいものである。

そこで、これだけの吟味をして置いて、さて子供を此の誤つた自重から救ふて、正しい自重へ導くにはどうしたらよいか、之れから教育上の實際に移る。(つゞく)